防災基礎講座

救急搬送データから見る日常生活の事故

～身近な事故から身を守るために～

田中(たなか) 富也(とみなり)　東京消防庁防災部防災安全課 消防司令

1. はじめに

東京消防庁管内では、 1日に約 300 人が「運動競技事故」、「自然災害事故」、「水難事故」、「労働災害事故」又は「一般負傷」に該当する日常生活事故で救急搬送されており、約5分に1人が救急車で医療機関へ搬送されていることになる。ベランダからの墜落、浴槽での溺水などは繰り返し発生し、エスカレーターでの挟まれ事故、遊具での事故など、様々な事故が発生している。

これらの事故は、特別な場所ではなく、私たちが日常生活を営む身近な場所で発生している。また、事故発生時の状況を見ると、本人や身の回りの人が遭遇しやすい事故の傾向や過去に発生した事故を知っていれば、防ぐことができた事故も少なくない。
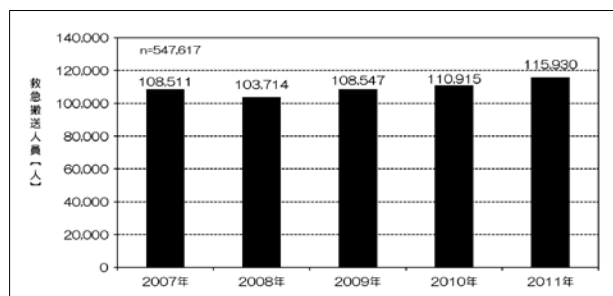
図１　日常生活事故による救急搬送人員

2. 日常生活事故の全体像

東京消防庁管内では、日常生活の事故により 2007 年から 2011 年の５年間に 547,617 人、年間約 11 万人が救急搬送されている（図1）。救急搬送人員を年代別にみると３歳以下の子どもと高齢者が多い（図2）。

日常生活事故全体の半数以上が住宅で発生し、全体の４分の1以上が、道路や駅などの交通施設で発生している（図3）。

事故には、年齢によって起こりやすい事故があるが、各年代を通して多い事故は、「ころぶ」と「落ちる」である（図4）。また、「溺れる」と「やけど」は、
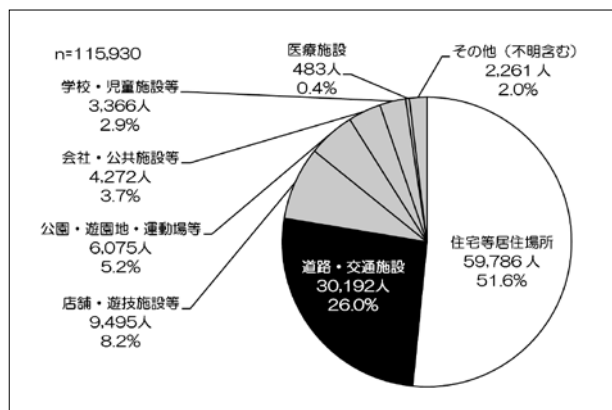
図３　事故発生場所別搬送人員（2011年）
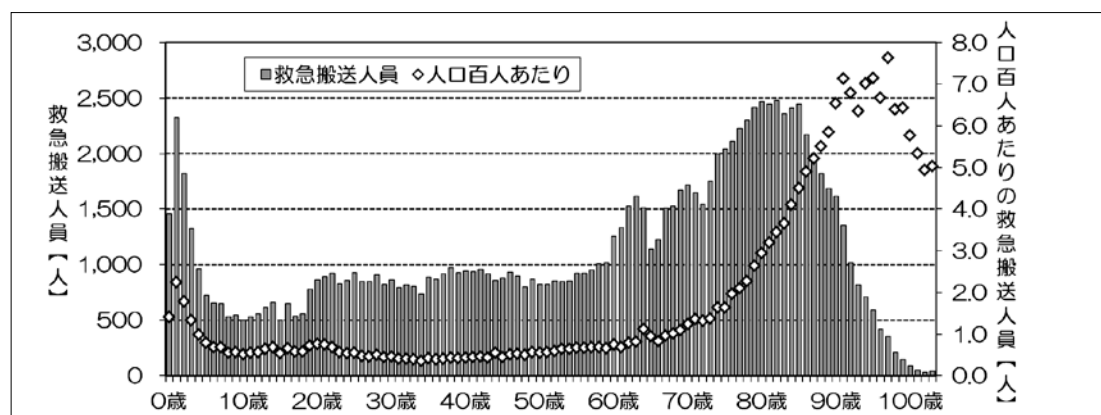
図２　年齢別の救急搬送人員（2011年）

全ての年代で入院を要する程度である中等症以上の割合が高くなっている。

3．年代ごとの事故分析

（1）乳幼児の事故（0歳から5歳）

東京消防庁管内では、過去5年間で日常生活の事故により43,263人、毎年8,000人を超える乳幼児が救急搬送されている。更に2011年中の乳幼児の事故を年齢別でみると、1歳児の救急搬送人員が2,324人で最も多い。

事故の発生場所でみると、事故の約7割は、最も身近な住宅等居住場所で発生しており、安全と思われる家庭内で多くの事故が発生していることがわかる。

① 0歳児の事故

0歳児に最も多い事故は「落ちる」で、次に多いのが「ものがつまる等」となっている。また重症度が高い事故は「溺れる」と「やけど」で、「溺れる」事故は約2人に1人が中等症以上と診断されている。

「落ちる」事故の要因としては「ベッド」から落ちることが多く、次に多かった誤飲や窒息などは「包み・袋」「タバコ」の誤飲が多い。また、重症度が高い「溺れる」事故の多くは「浴槽」で発生している。

■ 重症となった事故事例と事故防止のポイント ■

【事例1 落ちる】男児が自宅で高さ約20cmのソファーからフローリングの床に転落した。昼寝後に反応が悪く起きなかったため、そのまま様子を見ていたが、徐々に顔色が悪くなり、ぐったりしてきたため母親が救急要請した。（5か月 男児 重症）

【事例2 溺れる】 自宅で父親と入浴していたが、父親が居眠りしてしまい、いつもより長く入浴していることを不審に思った母親が様子を見に行ったところ、浴槽内にうつ伏せで浮いている娘を発見した。（9か月 女児 重篤）

≪事故防止のポイント≫

●家の中は、子どもの目の高さで危険がないかチェックする。

●やけどの恐れのあるものは、子どもの手の届くところに置かない。

●乳幼児をお風呂に入れている時、水遊びをさせている時は、決して目を離さない。

② 1歳児の事故

1歳児に最も多い事故は0歳児と同じく「落ちる」であるが、2番目に「ころぶ」が多くなっている。歩く、走る、といった行動が出来るようになる時期だが、まだバランスがとれず、階段等から落ちたり、ころんだりすることが多くなる。

「落ちる」要因として最も多いのは階段であるが、自転車から落ちる事故は、0歳児には見られない。ものがつまる等は「タバコ」「薬剤等」で多く発生しており、タバコの誤飲は、0歳児、1歳児に多いのが特徴である。歯ブラシが刺さって怪我をする事故も1歳児で最も多く発生しており、注意が必要である。

■ 重症となった事故事例と事故防止のポイント ■

【事例1 落ちる】 自宅の階段で2階から子どもが転落し、全身を強く打ちぐったりとしてしまったため救急要請した。（1歳 男児 重症）

【事例2 切る・刺さる】 食事中に箸を持って遊んでいた女児が、箸をくわえたまま転倒した。箸の先端約2.5cmが折れ、口腔内から出てこなくなったため救急要請した。（1歳 女児 重症）

≪事故防止のポイント≫

●小さな子どもが箸や歯ブラシを使用している時は歩いたり走ったりさせない。
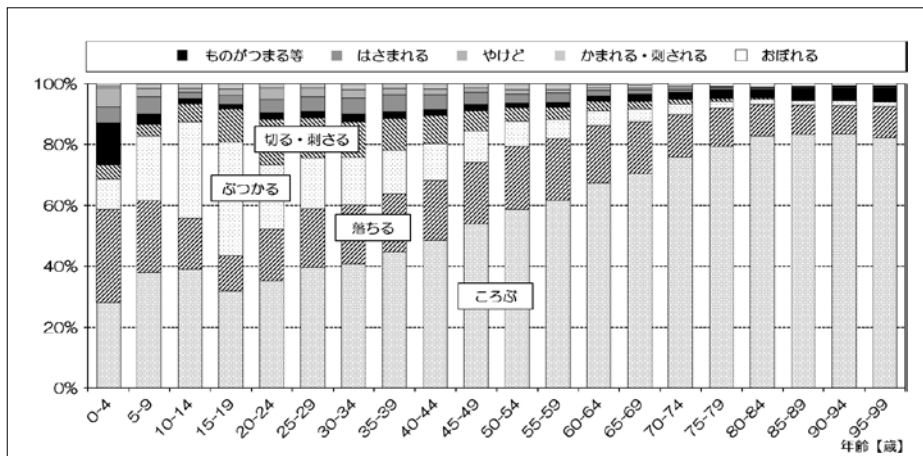
図4 年齢層別事故構成割合（2011年）

③ 2歳児の事故

2歳児では、運動機能・認知機能がさらに発達し、何処へでも行きたがるようになることもあり、「ころぶ」事故が最も多くなり、次に「落ちる」事故となる。家の中を走り回って、テーブルの角等、家具に「ぶつかる」事故が上位に来るのも2歳児からの特徴である。

■ 重症となった事故事例と事故防止のポイント ■

【事例1 落ちる】 コンビニエンスストアに停車中の自転車の前の補助椅子から転落し、頭部、額、鼻部を打って受傷した。(2歳 男児 重症)

【事例2 ものがつまる】 2歳の男児が自宅で食事中に、パンを喉に詰まらせた。(2歳 男児 重篤)

≪事故防止のポイント≫

●窓際やベランダには、子どもが登れるようなものを置かない。

●自転車の乳幼児用座席に子どもを乗せたままその場を離れない。ヘルメットをかぶらせる。

●食べ物は成長段階に応じた大きさや形状にして食べさせる。

④ 3〜5歳児の事故

3〜5歳児でも、「ころぶ」「落ちる」事故が多く、次いでテーブル等に「ぶつかる」事故が多くなっている。「溺れる」事故は、0〜2歳児と同様に浴槽が最も多いが、プールやビニールプールで溺れる事故も見られる。また、中等症以上の割合が6割を超えており、大人の側に、少しくらい目を離しても大丈夫という油断があるのかもしれない。

「ものがつまる等」では、「アメ玉」の他、「ビー玉」などの玩具や「硬貨」などを喉につまらせる事故も発生している。行動範囲も広く活発になり、遊具や玩具、遊びに起因する事故が起きやすくなるのが特徴である。

■ 重症となった事故事例と事故防止のポイント ■

【事例1 落ちる】 祖父宅の2階窓際で遊んでいたところ、網戸が破れて約3m下の地面(コンクリート)と植栽の間に墜落し受傷した。(3歳 女児 重症)

【事例2 挟む・挟まれる】 駅の上りエスカレーターに乗っていた際、ステップと側面の間に手を挟み受傷した。(3歳 男児 重症)

≪事故防止のポイント≫

●乳幼児をお風呂に入れている時、水遊びをさせている時は、決して目を離さない。

(2) 6〜12歳(小学生)の事故

6歳から12歳までの小学生の年代では、過去5年間で20,066人、毎年4,000人前後が救急搬送されており、特に15時、16時の放課後の時間帯に多くの事故が発生している。

発生場所は、乳幼児の時期と違い、住宅等居住場所に加え、公園や学校等自宅以外の場所が多くなっている。

事故種別では、「ころぶ」「ぶつかる」「落ちる」の順に多く、また、これらの事故で大半を占めている。「落ちる」事故と「溺れる」事故の重症度が他の年代と比較して高いのが特徴である。

発生状況をみると、体育館や校庭などの運動施設での転倒、雲ていや滑り台、鉄棒などの遊具からの落下が多くなっている。また、子ども同士でぶつかって受傷する事故も多い。

■ 重症となった事故事例と事故防止のポイント ■

【事例1 落ちる】 友人宅2階屋根に上っていて屋根から転落し足部を受傷した。(12歳 男児 重症)

【事例2 やけど】 電気ケトルのコードを足にひっかけ、沸いていたお湯をかぶり受傷した。(6歳 男児 重症)

≪事故防止のポイント≫

●身体の成長に伴う運動能力の発達、冒険心の増大等の特徴を踏まえた安全教育による事故防止が必要である。

(3) 13歳〜18歳(中学生・高校生)の事故

中学生・高校生の年代では、過去5年間で16,505人、2011年中は、3,516人が救急搬送されている。

発生場所は、学校・児童施設等が最も多く、次いで公園・遊園地・運動場等が多くなっている。

この年代の事故は、「ぶつかる」「ころぶ」事故が大半を占めており、人とぶつかったり、ボールやバットにぶつかる等、運動中の事故が多くなっているのが特徴である。

■ 重症となった事故事例と事故防止のポイント ■

【事例1 落ちる】 友人と建物の屋根上で遊んでいたところ、誤って7〜8mの高さから墜落した。(16歳 男性 重症)

【事例2 ぶつかる】 中学校の球技大会(サッカー)の試合中、ボールの取り合いで小競り合いになり、ぶつかって後頭部から落下し受傷した。(15歳 男性 重症)

≪事故防止のポイント≫
●ウォーミングアップやストレッチを入念に行う。
●指導者と保護者等は、日頃から具体的な注意喚起を行うとともに、応急手当の方法を身に付けAEDの設置場所を確認する等、不測の事態に備える。

（４）19歳から64歳（成人）の事故
成人は、毎年４万人を超える人が日常生活事故により救急搬送されている。事故が発生する場所は、住宅等居住場所が最も多く、次いで道路や交通施設が多くなっている。
事故種別でみると、成人は「ころぶ」事故が最も多く、「溺れる」事故は、中等症以上が９割を超えて重症度が高い。「落ちる」事故の原因としては、他の年代と同様に階段からの転落が多いが、脚立や踏み台から落ちる等、仕事中の事故が多いのも特徴である。また、飲酒後に駅ホームから転落する事故も発生している。
■ 重症となった事故事例と事故防止のポイント ■
【事例１ 切る】日曜大工中に電気のこぎりで左手の人差し指と中指を切り受傷した。（52歳 男性 重症）
【事例２ 溺れる】 河川敷で友人達とバーベキューをし、飲酒後に川に入って遊泳をしていたところ、水没した。（38歳 男性 重篤）
≪事故防止のポイント≫
●電動工具や機械の電源を落とさずに点検整備や清掃を行って、けがをしてしまう事案が発生している。電動工具や機械での事故は大けがにつながるので、取扱説明書をよく読み、正しく使用する。
●飲酒後に遊泳は行わない。周囲の人も遊泳をやめさせる。

（５）増える高齢者（65歳以上）の事故
東京消防庁管内では、日常生活事故により、過去５年間で約25万人の高齢者が救急搬送されており、事故全体の約45%を占めている。救急搬送人員は毎年増加しており、2007年の45,368人から2011年の56,512人へと5年間で1万人以上増加している（図5）。
高齢者の事故の大きな特徴の一つは、事故の発生場所が住宅（老人ホーム等を含む）と、道路や駅などの交通施設の２種類で、全体の約90%を占めていることである。
事故種別では、「ころぶ」が全体の約７割を占めている。65歳以上では、どんな事故も中等症以上となる割合が高く、「ころぶ」でも４割以上が中等症以上
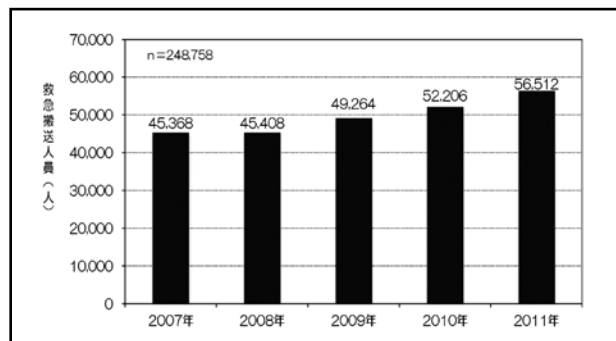
図５ 高齢者の救急搬送人員

と診断されている。
食べ物による窒息も多く、餅や総菜を喉に詰まらせる事故が起きている。また、「溺れる」事故が多いのも高齢者の特徴で、ほとんどが浴槽で発生しており、中等症以上が６割となっている。
■ 重症となった事故事例と事故防止のポイント ■
【事例１ 溺れる】 飲食後に一人で入浴し、家族が様子を見に行ったところ、浴槽内で水没していた。（67歳 男性 死亡）
【事例２ ものがつまる】 自宅で食事中、餅を喉に詰まらせて意識がなくなった。（69歳 男性 重篤）
≪事故防止のポイント≫
●高齢者の入浴は、思いのほか身体に負担をかけることを知る。
●餅は、窒息の危険が高いことを十分に認識するとともに、食べ物は食べやすい大きさに切るなどの工夫をする。
●転倒防止のため、日頃から部屋の整理整頓を心がける。

４．まとめ

日常生活において誰もが事故に遭う可能性はあるが、何を注意すべきかを知識として知っていれば、事故に遭遇する可能性を減らすことができる。
しかしながら、どんなに注意しても事故に遭遇する可能性をゼロにすることはできない。万が一事故に遭遇した時には冷静に対処できる行動力を身に付けることも大切なことであり、そのために救命講習を受講し、正しい応急手当の知識を身につけることも一つの方法である。
東京消防庁では、引き続き日常生活事故情報の収集と分析を行い、皆様の日常生活の安心・安全に役立つ情報の発信に努めていく。